日本刀の美に欠かせない

天然砥石 途切れる恐れ

人造に押され 採掘業者減

美術品として人気が高く、刀剣を擬人化したゲームの影響で若い女性を中心にブームとなっている日本刀だが、その研ぎに不可欠な天然砥石の産出が途絶えつつある。かつては全国200か所近くで採掘されていたが、人造砥石の普及に押されるなどし、今では数か所の産地を残すのみに。人造砥石では刀身の独特の輝きを引き出すのは難しく、日本刀の研師らは危機感を募らせている。

日本刀は平安時代後期に原型ができ、片刃で反りのある刀身が特徴。美術品として都道府県に登録されているものなど、国内に現存する日本刀は約250万本とされるが、手入れされずに眠ったままのものも多い。

近年、日本刀をモチーフにしたゲームが大ヒットし、名刀目当てに博物館や美術館を訪れる「刀剣女子」も増加。京都国立博物館（京都市東山区）で開催中の特別展「京のかたな 匠のわざと雅のこころ」（読売新聞社など主催）にも連日、多くの女性ファンが詰めかけている。

ゲームヒット 「刀剣女子」増

「希少なものは、この5年で値段が20倍に高騰した」。京都市左京区で日本刀の研磨を専門に手がける研師の玉置城二さん(45)は、ため息を漏らす。今では高い砥石は数十万円にもなる。

刀匠が鍛えた刀を磨き、刃先近くで波打つ「刃文」や、木目のような刀身の模様「地肌」を美しく浮かび上がらせ、美術品の域まで高めるのが研師の腕の見せ所だ。

その刀の研磨に欠かせないのが天然砥石。泥や生物の化石などが重なってできた堆積岩を成形した天然砥石は、粒子のきめが細かく、刀の輝きを出す仕上げの工程には欠かせない。中でも京都府で採れる品種「内曇」は特にきめが細かく、長らく重宝されてきた。

しかし、その砥石が枯渇の危機に直面している。

日本刀文化振興協会（東京）によると、明治時代に全国200か所近くあった天然砥石の産地は減り続け、今では京都府亀岡市や長崎県など数か所という。中でも「内曇」は、最大手の京都市の業者が数年前に採掘をやめ、採掘しているのは亀岡市の1業者だけだ。

背景にあるのが、採掘業の衰退だ。高度経済成長期以降、坑道の落盤や粉じんといった過酷な労働環境から後継者が減少。さらに1960～70年代に酸化アルミニウムやダイヤモンドなど硬い鉱物の粒子を接着剤などで固めて作る「人造砥石」が普及。天然砥石の方が刃先を鋭利にでき、切れ味も長持ちするが、家庭や工業用の刃物の研磨には人造砥石で対応できるため、割高な天然砥石は取って代わられた。

だが日本刀を研ぐ場合、人造砥石では研磨力が強すぎて刀身が鏡のように光ってしまい、日本刀独特の青黒い光を宿した美しさが損なわれてしまう。このため研師らからは「天然砥石がなくなれば、日本刀の魅力が守れない」と危惧する声も上がる。

こうした状況に、東京の研磨道具専門店は、京都府の閉山した鉱山の採掘権を得て、自ら「内曇」を探すなど、天然砥石の供給に向けた新たな動きも出ている。

㊤砥石で日本刀を研ぐ玉置城二さん。刀剣ブームもあり、研磨の依頼も増えているという（京都市左京区で）㊦鉱山で砥石を採掘する土橋要造さん（今年6月、京都府亀岡市で）＝いずれも長沖真未撮影

亀岡の工房 100→1軒「伝統廃れる」

今も採掘が続いている京都府亀岡市の鉱山。麓から車で15分、さらに険しい山道を1キロ近く歩いて登ると、坑道への入り口が姿を現す。内部は電気で照らされて明るいが、足元には巨石がゴロゴロ転がり、過去の採掘跡の穴が縦横に広がる。

鉱山を管理するのは、1877年創業の砥石採掘業「砥取家」（亀岡市）の4代目・土橋要造さん(68)。地層によって岩の性質は異なり、長年の勘を頼りに手探りで砥石の鉱脈を掘り当てる。時にはダイナマイトも使うという。

亀岡市は古くから砥石の産出地で、市内には100軒を超える砥石工房があったが、人造砥石の普及などで次々と廃業。現在は砥取家が市内で唯一の業者だ。

土橋さんも一時は廃業を考えたが、ホームページを開設し、国内外の販路拡大を模索。今では天然砥石の魅力を知り、海外から砥石の買い付けに訪れる料理人もいるという。土橋さんは「誰かが日本の刃物を下支えする役割を果たさないと、伝統文化が廃れてしまう」と話す。